



左上、玄関では大きな吹抜けにあらわになったダイナミックな小屋組に圧倒される／右上、南の庭を望む広縁は元の間取りを活かしたもの／右、レンガの炉壁と薪ストーブの名品・バーモント・キャスティング社 デファイアントが重厚感をかもし出す／下、台所だった場所には桜の無垢板で囲炉裏をこしらえた



昭和初期の古民家で 陰影と静謐を味わう

筑紫野市の山間に佇む、昭和初期の古民家を再生した和の家「吉木」は和モダンスタイルのモデル住宅。現地を訪ね、古くて新しい住まいを創造し続けるハウズランド社の思いに迫ってみました。

wa no ie
YOSHIKI
民家再生モデル住宅 和の家「吉木」

古民家再生技術が叶える、美しい日本の住まいとの出会い

筑紫野市の山間に佇むハウズランド社のモデル住宅「和の家「吉木」」は、昭和初期に建てられた築90年の農家住宅を全面的にリノベーションしたものだ。きっかけは15年前にさかのぼる。古民家が売りに出ていると聞いて現地調査に行く、見た目はボロボロですが、柱と梁はしっかりしているのがわかりました。決め手になったのは見事な梁、建物の端から端まで10mはあろうかという太い棟持ち梁と、縦に「三引き」と言われる3層からなる地松の小屋根の程度が良く、扱いがいいがあると思えました。そこで、構造の梁と柱だけ残して、スケルトン状態からフルリノベーションを行い、モデルハウスにすることにしました」と、「ハウズランド社」代表の三上信吉さんは振り返る。

「住まいの顔」ともいえる玄関は、インパクトを与えるために、天井板をなくして吹抜け大空間に。1階の玄関から奥に伸びる廊下の左右に壁や襖で細かく区切られた洋室や和室がある間取りは全面的に見直し。廊下をなくして居住スペースを最大限に確保し、部屋と部屋がゆるやかにつながる大空間に仕立てなおした。アメリカ製の大きな薪ストーブのあるくつろぎのスペースや、囲炉裏を囲むような空間など、暮らしを楽しむための提案も散りばめられている。

西洋漆と無垢材をふんだんに使った陰影に富む和のしつらいは美しい。しかし、気になるのは住心地だ。ときに風通しの良すぎる古い家は、冬の寒さにめっぽう弱く、亜熱帯化した現代の気候では夏を涼やかに過ごすのも難しい。「この建物では、屋根の瓦と野地板の間に断熱材を入れたほか、床・壁にも断熱材を入れて熱が逃げないようになっています。さらに、窓はすべてペアガラスにして断熱性を高めています。古民家の趣を残しつつ、住宅性能を上げることは十分可能なのです。単に昔のままの姿に再生するだけでなく、現代のライフスタイルにも対応できるように、新しい技術やアイデアを盛り込む。自然素材の使い方もインテリッパワードデザインまで、ここを見れば、いろんなヒントが見つかるに違いありません。」



自然に囲まれた和の家「吉木」では、梁や柱などの構造は昭和初期に建てられたときのままに残し、デザインは一新。和のモチーフを取り入れた繊細な造作に職人の技が光り、四季折々の花木が住まいに華やぎを添える